近現代のナラノヤエザクラについて

川　端　一　弘

奈良植物研究　第27・28号　別刷
平成17年12月

奈良植物研究　第27・28号（平成17年）　Nara Botany　Nos. 27, 28 (2005)

近現代のナラノヤエザクラについて

川　端　一　弘

天然記念物ナラノヤエザクラの名称は現在「知足院ナラノヤエザクラ」となっている．この名称については拙稿（2001）において「知足院のナラノヤエザクラ」が原名称であり，その「の」の意味について後日述べたいとした．ここにその意味を示し，さらに明治時代以降のナラノヤエザクラについて述べてみたい．

天然記念物としてのナラノヤエザクラ

ナラノヤエザクラが天然記念物に値するとして推薦を行ったのは史蹟勝地調査会地方委員の岡本勇治である．このことは岡本自身（1926）が述べている．永らくこの事実が語られることはなかったが北川尚史（1997）により紹介された．岡本の申請に関する行政書類は見あたらないが（内務省の書類は関東大震災の際灰燼に帰した），岡本の著書や新聞記事によりこの間の経緯を若干知る事ができる．岡本は（原文のまま引用）

「奈良の八重桜

・知足院の奈良八重桜　東大寺知足院境内にあり．其の地盤は即ち第三紀層にして砂利粘土礫の互層よりなり土質一般に肥沃ならず，然れども排水よくかつ向陽傾斜地帯なるを以て却って，この桜には好適せるが如し，尤もこの奈良八重桜は樹幹二尺八寸，高さ二十余尺といふ中等大のものなれども，この木が母株より漸次無性的にも繁殖せる特性は甚だ明瞭に窺はる．而してその樹形も殆んど模範的にしてかつその勢力今なほその危険地帯にあるにも拘はらず旺盛なり．これ余が特に天然紀念物として推選せし所以なり．

・春日神社の奈良八重桜　樹幹の大きさより云へば知足院の桜に勝る事約五寸，優に三尺三寸あり．樹高もまた彼れを凌ぐ．唯惜しむらくはその生育地帯が春日神社参詣者にその根株を踏圧せられ，その樹命次第に短縮しつゝあり．

・奈良男子師範学校の奈良八重桜　古歌に名高き奈良の都の八重桜の古趾は即ち此処なり。」

と紹介している．つまり当時の奈良には三ヶ所のナラノヤエザクラが知られていた．申請には最初この三ヶ所のナラノヤエザクラがなされていたようである．

大阪朝日新聞大和版によると大正11年4月12日に三好学は奈良県主催で開催された桜花展講演会で「美しき桜と其の来歴」，「吉野の桜と其の保存」と二回にわたる講演を行っている．多忙な三好は講演後その日の夜行で帰京した．同年6月18日にはナギ林の視察に来県，さらに11月7日には，師範学校のナラノヤエザクラが衰弱しているとの報を受けて来県し調査した．

翌大正12年3月7日にはナギ林とともにナラノヤエザクラは天然記念物に指定された．春日神社と師範学校のナラノヤエザクラは上記の理由により除外されたようである．

当時の天然記念物指定には三好や白井光太郎たち国の調査会の委員個人の見解が反映されていた．内務省における指定の承諾は三好たちの献言によりなされていた．

三好は調査報告やその後の著書においては全て「知足院の奈良八重桜」とし，文部省発行の『史蹟名勝天然紀念物一覧』（1923）においても「知足院の奈良八重桜」となっている．しかし，印刷のミスのためか官報では「知足院奈良八重桜」となっていたのである．「の」には当時知られていた三ヶ所の意味が背景にあるのである．

指定に至る経緯を通して大正時代のナラノヤエザクラを概観した．さらに今一つの資料を紹介しておきたい．

大阪朝日新聞奈良版昭和10年5月1日の記事には「僅かにのこる奈良八重桜発見　小清水女高師教授が附属高女の中庭で」の見出しでナラノヤエザクラの新たな発見を伝えている．

「（前略）古き伝説を持ち大宮人から讃美されて

いた古都の八重桜は時の流れとゝもにその影を潜め現今『奈良八重桜』として現存しているのは天然記念物に指定されている知足院の二本の老樹と春日神社境内の老樹に男子師範にある五本の幼樹に過ぎず，八重の愛好者，植物学者らはその前途を悲観している矢先，二十九日午後，女高師植物学教授小清水卓二氏が同校附属高女中庭に咲き乱れる高さ二丈五尺，根本の周囲三尺の枝ぶりのよい桜を調べると意外に立派な『奈良八重桜』と断定するに足る確証を認め，同教授は雀躍して喜び早速稲葉校長に報告するとゝもに，桜の研究者として有名な三好博士に通知することになった，小清水教授は語る『こんなところに立派な八重が残存していたことは驚きました，八重桜としてのすべての特長は完全に備へています，なんでも大正三年春三月，当時附属高女に教鞭をとっていた三宅よし女史が知足院から小さな桜を移植したものらしく貴重な存在です』」

である．大正初期から知足院のナラノヤエザクラは知られていたのである．その小清水が後年にナラノヤエザクラは三好学が発見したとするのは理解に苦しむ．

明治時代のナラノヤエザクラ

明治時代にはナラノヤエザクラはどのように知られていたのだろうか．残念ながら明治のこの桜に関する資料はたいへん少ない．その少ない資料のうちに数点の名所案内絵図がある．絵図には八重桜として紹介されている．しかし，果たして実在していたのか覚束ないものが多い．

そのなかで一例興味ある絵図があり紹介したい．『奈良名所独案内』明治12年（1879）である．この図は橋井善二郎が金沢昇平の編集したものを出版したもので，金沢の跋文には「此図を製せし遠近より杖を曳て春日社，大仏殿其外名所旧蹟等をたづぬる人の道しるべに物せしまでにて，是や今の世に現存せる実況なり，諸君此図によりて道をもとめ給ハゝ，必すまよふことなかるへし，号て独案内といふ」とある．「今の世に現存せる実況なり」とあり，当時の奈良の状況を案内していることが知られる．図中には「八重サクラ」とあり，旧興福寺観禅院の位置に八重桜が記載されている．ナラノヤエザクラが実在していたとしてよいのではなかろうか．

明治維新後の変動は興福寺を廃寺へと追い込んだ．中世には絶大な権勢をふるった興福寺も神仏分離，廃仏毀釈の荒波には抗しえず，元号が明治に改元される前にすでに一山の僧侶はすべて復飾し，無住の寺と化した．明治4年ごろには築地塀は取り払われたという．無住寺の境内地は上知され，寺は廃寺となってしまった．東円堂跡がある観禅院のその後の消長は知り得ないが，ナラノヤエザクラは絵図から存在していたと思われる．

添上外四郡役所に委託されていた奈良公園の管理が県の直接管理に移管した後，公園の改良が本格的に計画された．明治27年には奈良公園改良諮詢会が創設され，諮詢会において公園係より提出された諮詢案その他が稟議された．

その第二回諮詢会（8月2日～4日）速記録には，土倉庄三郎より「一，土倉曰　他方ヨリ来ル人ハ奈良ノ八重桜ハ見事故ニ此辺ニ八重桜ヲ多数植ヘタシ，古昔ノ有名ナルモノナレハ西洋人ナル者モ尋ヌルモノアリ」と公園内へナラノヤエザクラの植栽が提議されたことが記録されている（『明治27年奈良公園改良ニ係ル書類　その一』）．

土倉の提議には別段異議は出ず，「一，会長曰　一号ハ他ニ意見ナケレハ是ニテ終リ，土倉君ノ説ノ件ハ別ニ苗場ヲ設ケテ仕立ツルコトニナサン（後略）」とある．

11月1日の諮詢決議には「一，八重桜ノ接穂台木植付場所費額等取調ノ事」とある．

その後のナラノヤエザクラについては記録がなく，土倉の提議のその後は不明である．奈良公園編年の記録である『奈良公園沿革梗概』には，八重桜の植栽記録が無い．ナラノヤエザクラは挿し木が難しくその増殖には困難がともなう．接ぎ穂は多数の植栽にまでいたらなかったと思われ，土倉の提案はどの程度実行されたか不明である．しかし，母樹が存在していた事は諮詢会の経緯から容易に推測できるであろう．

観禅院の跡地（駆□院，備荒貯蓄倉庫として使用されていた）は明治21年に開校した奈良尋常師範学校（現奈良教育大学の前身）敷地となった．絵図『奈良明細全図』（明治23年）には師範学校と八重桜が記載されている．師範学校の建物は明治30年に改築されモダンな洋風建築が採用された．この校舎正面には明治42年頃であろうか八重桜の写真が『奈良教育大学写真年表』にある．

このように明治時代のナラノヤエザクラについては現在のところ断片的な資料しか収集し得ない．しかし，明治末には写真が残っていることから継続的に受け継がれてきたことは明白であろう．

ナラノヤエザクラの学名ならびに和名について

ナラノヤエザクラに最初の学名を印したのは三好である．三好はナラノヤエザクラを種として記載した．和名はナラノヤエザクラである（詳細は拙稿を参照されたい）．ついで小泉源一（1923）がケヤマザクラを Prunus donarium subsp. serrulata var. pubescens Koidz. として発表し，ナラノヤエザクラをその品種 forma antiqua (Miyoshi) として発表した．和名はナラノヤエザクラである．これ以降ナラノヤエザクラの学名はその母種とされるカスミザクラ，ケヤマザクラの学名が変転するために幾度か変遷する．

牧野富太郎（1926a）は Prunus serrulata L. subsp. pubescens Makino var. antiqua (Miyoshi) Makino とし，和名をナラヤエザクラ，ナラノヤエザクラ，ナラザクラとした．さらに牧野（1928）は Prunus serrulata の一群にケヤマザクラ P. serrulata var. pubescens (Makino) Wilson を，ナラノヤエザクラを P. serrulata var. antiqua (Miyoshi) Makino として記載した．このときに和名をナラヤエザクラとした．八重桜であるナラノヤエザクラをケヤマザクラと同列に記載したこの学名には疑問を感じる．さらに和名を何故かナラヤエザクラと限定をしている．

牧野は最初にナラノヤエザクラの学名を訂正したときにすでに三好や小泉が和名としたナラノヤエザクラを無視して三つの和名を挙げている．

牧野は植物の名称には神経質に拘りを見せ多くの随筆などにその伝来を書いている．このことは牧野の著書を見ればすぐに理解していただけるであろう．しかし，ナラノヤエザクラについては何も語っていない．何故ナラヤエザクラに限定したか語っていない．そこでナラヤエザクラの論拠ならびに牧野が和名を訂正した背景を推論してみたい．

江戸時代の桜についての文献を調査したのは三好である．牧野が学名を発表する以前に桜の文献について発表を行っている（1919→1938，1926→1938）．

三好によると江戸時代中期以降の桜図の中心となるのは，三熊花顛の『花譜』であり，後のものはこの桜花帖を模写，転写したものが多いという．伝本は桜井□による模写であるがナラノヤエザクラは「寧楽八重桜」とある．花顛の妹露香による模写帖には「奈良の八重桜」とありナラノヤエザクラと呼称していたことは明白である．

ナラヤエザクラとあるのは畔田伴存の「古名録」のみであろう．

「奈良ノ都八重桜図　古花　桜品曰奈良桜八重桜也，花小輪にして甚やさしく色赤く茎長く細し，按ニ古花奈良ヤエザクラハ花小ク弁細シ多ク重ナレリ，色八重ヒトヘノ如シ，新花ノ奈良ヤヘザクラハ花大輪コノ弁□ク，色亦八重ヒトヘニ似テ微ニ赤ヲ帯タリ，尤美花也，然トモ不眞」

畔田が名称としたのは正確には「奈良ノ都ノ八重桜」（沙石集などの説明にある，上記の「奈良ノ都八重桜」は「ノ」が欠落したものであろうか）であるが，本文中には古花の奈良ヤエザクラ，新花の奈良ヤエザクラとしている．この古花，新花について三好（1923）は「之に依ると，此時代に新花として存在して居た奈良八重桜は大輪であるかの如く思われるが，併し花の大きさに就ては正確なる寸法が載って居ないから，はっきり解らない．今日の奈良八重桜はさまで大輪ではなく，言はゞ小輪の部に属するものである。」としている．畔田自身が「尤美花也，然トモ不眞」とし，曖昧模糊としている．

このナラヤエザクラを何故に牧野は和名として採用したのであろうか．

前述した大正11年4月12～14日の奈良県主催の桜花展は，東京で開催されていた「桜の会」の桜花展がはじめて他県において開催されたもので大規模なものであった．このときの講演会講師には最初三好とともに牧野も予定されていた（奈良県庁文書『大正十一年四月開催　桜花展覧会一件』）．県は講師派遣の申請を内務省に行っている．

「大正十一年三月十一日起案，施行

桜花講演会講師派遣方申請

教第一四九六号

年　月　日

知事

内務大臣官房地理課長宛

桜花講演会並仝展覧会開催ニ付講師派遣方申請

来ル四月十二日ヨリ三日間略々別記計画ニ依リ桜ニ関スル講演会等開催致候間，御省史蹟調査会委員理学博士三好学氏ヲ四月十日夕刻奈良着ノ予定ニテ御派遣相願度此段申請候也

追テ理学博士牧野富太郎氏ハ史蹟調査会委員ニハ無之候得共，御省ヨリ御差遣被成下候様御配慮相煩ハシ候ハヽ洵ニ好都合ニ有之候条宜敷御取計相成度候」

また三好，牧野が講師に予定されている事は新聞にも掲載された（大阪朝日新聞大和版大正11年3月12日）．

ところが内務省からの返書は

「第一一二号ノ内

大正十一年三月十五日

堀切内務大臣官房地理課長

木田川奈良県知事殿

本月十一日教第一四九六号御申出ニ依リ史蹟名勝天然紀念物調査会委員三好学氏ヲ派遣セラレ候，同氏ハ天然紀念物トシテノ桜ニ就テ講演セラルル筈ニ付御承知相成度候

追テ牧野富太郎氏ハ当省ヨリ派遣ノ運ニハ至リ難ク候間御了知相成度申添候」

というものであった．新聞にも掲載された予定であったが牧野の講演は不可能になったのである．この因は牧野自身の過去の行動にもあったようである．牧野の自由奔放な行動については北川（1992）がその片鱗を語っている．

こうした背景もあってか牧野（1926b）は，内務省（昭和になり文部省へ移管される）と密接な関係にある史蹟名勝天然紀念物保存会の植物関係者を論難する文章を『植物研究雑誌』に掲載する．次号では植物関係者は白井光太郎を指しているのではないと弁明を行っていることから三好学のことを指しているのは明白である．

牧野が和名をナラヤエザクラに限定した背景には，三好や若き学者である小泉に従順するのは潔しとしなかった牧野の心理にあるのではなかろうか．

前述したように最初牧野は和名にナラヤエザクラを書き加えた．このことは牧野自身が『古名録』の記載を承知していたのを証明する．牧野は三好の論考をも当然知っていたであろうし，何よりも牧野自身が多くの古典にも通じていた．このような歴史的背景を承知して和名にナラヤエザクラを加え，1928年にはナラヤエザクラに限定したのである．しかし，これは牧野にとって正しくない選択であった．

牧野（1940）は『牧野日本植物図鑑』発刊に際してナラノヤエザクラの挿図を用いP. donarium Sieb. var. pubescens Makino forma antiqua Makinoと訂正した学名を記載し，和名をナラヤエザクラとした．ナラノヤエザクラは品種であり，図鑑の本文には記載がない．本文に記載しないナラノヤエザクラの挿図をあえて掲載するのには何らかの理由があろう．牧野がナラノヤエザクラについて何等の一文を残していないことから，また開花時期に奈良へ来県したこともなく特にこの桜に関心をもっていたとは思えない．

後年には牧野のねらい通り文部省が和名にナラヤエザクラを採用したため一般化することになった．牧野の和名の根拠は畔田にあり，脆弱な根拠である．桜の文献について詳細な論考を残し，ナラノヤエザクラについても論考を残した三好に比べ，牧野はナラノヤエザクラには論考を残していない．牧野のナラヤエザクラの和名については再考する必要があるのではなかろうか．

謝辞

奈良の名所絵図については奈良県立図書館員大宮守友氏に解読のお世話になった．奈良県庁文書は奈良公園管理事務所徳田彰氏，有埜善徳氏に閲覧の便宜を賜った．記して感謝の意を表させていただく．

参照文献

川端一弘．2001．「ナラノヤエザクラ」の和名．奈良植物研究会会報73：12－14．

北川尚史．1992．私の植物物語．奈良植物研究会会報47：23－26．

1997．岡本勇治－奈良県植物研究の先駆者－．覆刻版　大和植物志1－13．大和精版印刷．

小泉源一．1923．東亜植物考察．植物学雑誌37：44．

岡本勇治．1926．春日山原始林植物調査報告（1923年説がある．年代を確定

するには至っていないが1926年説とした）謄写版印刷.
牧野富太郎. 1926a. 日本植物新研究ノ発表. 植物研究雑誌 3 (4)：13－16.
1926b. 東京ノ天然記念物保存会ニ対スル多数人士ノ感想. 植物研究雑誌 3 (3)：48－50.
1928. 日本植物新研究ノ発表. 植物研究雑誌 5 (3)：11－14.
1940. 牧野日本植物図鑑. 北隆館.
三好学. 1919→1938. 市橋長昭撰花譜の解題並に其文献的価値. 桜. 冨山房.
1923→1938. 名桜の保存に就て. 桜. 冨山房.
1926→1938. 三熊花顛桜花帖考並に其解題. 桜. 冨山房.
文部省. 1923. 史蹟名勝天然紀念物一覧.
奈良教育大学. 1987. 奈良教育大学写真年表.
1990. 奈良教育大学史－百年の歩み－. 奈良教育大学創立百周年記念会.

絵図，古典，行政文書は以下による.
絵図『奈良名所独案内』. 1879. 奈良県立図書館蔵.
絵図『奈良明細全図』. 1890. 奈良県立図書館蔵.
奈良県庁文書. 1894.『明治27年　奈良公園改良ニ係ル書類　その一』.
1906.『奈良公園沿革梗概』（一部を除きほぼ全文『奈良公園史』に翻刻所収されている）.
1922.『大正十一年四月開催　桜花展覧会一件』奈良県立図書館蔵.
畔田伴存『古名録』早稲田大学出版部版. 1978.
（〒631－0045　奈良市千代ヶ丘３－１－60）

引用文献
村田源．2004．近畿地方植物誌：70．大阪自然史センター．
布谷知夫・桑垣瑞編．2002．琵琶湖博物館資料目録 6 号　植物標本 1　桑島正二植物標本目録：72．滋賀県立琵琶湖博物館．
岡本勇治．1937．大和植物志〔復刻版〕：83．大和山岳會事務取扱所．

（〒590－0115　堺市南区茶山台 3－36－15）

川 端　一 弘 ：「近現代のナラノヤエザクラについて」補足

先に明治維新以降のナラノヤエザクラについて『奈良植物研究』27・28 号（2005）において紹介をした。その後に新しく資料の知見を得たので紹介をし、また論究できなかった事項について紙面をお借りして補足を行いたい。

見つかった資料は鳥居武平『奈良名所案内詞』（1892）である。その内容は

「（七七）八重桜　今は師範学校の門内にあります。此所はもと東円堂の旧地でござる、此桜御一新後すたってござりましたが、博覧会社が碑を建て石柵を設け八重桜の新樹植たでござる」

とある。八重桜とあるのは勿論ナラノヤエザクラのことである。

明治維新後すぐに神仏分離令が出され、興福寺は廃仏毀釈の荒らしに巻き込まれて廃寺に追い込まれる。維新後の混乱のさなか東円堂跡がある勧禅院も多くの塔頭とともに廃院となった。その後の勧禅院の消長は判然としないが、鳥居によるとナラノヤエザクラもともに廃っていたらしい。維新の混乱のさなかにはナラノヤエザクラにまでは目が向かなかったようである。

その東円堂の旧地に博覧会社が石柵を設けてナラノヤエザクラを新たに植えたというのである。博覧会社とは

「明治七（一八七四）年八月、時の奈良県権令藤井千尋のすすめで、植村久道・鳥居武平・橋井善二郎ら奈良の有力町民が奈良博覧会社（資本金三五〇〇円）を設立し、東大寺の龍松院に本社をおいた。そして翌八（一八七五）年四月一日から六月十九日までの八〇日間、東大寺大仏殿と回廊を会場に第一次奈良博覧会が開かれた」（山上，2003）

とある奈良博覧会社のことで鳥居は主事、のちに会長になった人物である。

さて、奈良博覧会社が東円堂旧跡にナラノヤエザクラを植えて整備したことが判明したが、その時期について考察したい。

川端（2005）において金沢昇平の『奈良名所独案内』明治 12 年（1879）の図に八重桜が示されていることよりこの頃にはナラノヤエザクラが東円堂旧跡に存在していたことを推量した。それならば整備されたのは奈良博覧会社が第一次奈良博覧会を開催した明治 8 年（1875）から四年の間に行われたことになる。

現在県営登大路駐車場になっている東円堂旧跡のナラノヤエザクラの左後ろに自然石の碑文がある。石碑には「八重桜古蹟　　明治九年六月　　博覧会社建」とある。

このことは何を意味するのか今まで不明であった（北川（2004）ほか）。『奈良名所案内詞』から奈良博覧会社が石垣を設けてナラノヤエザクラを植え、旧跡に「博覧会社が碑を建て」たとあり、まさしくこの石碑がその碑である。それは明治9年6月であることが判明する。明治維新後の廃仏毀釈、それに続く文明開化政策と混乱が続いた奈良町にようやく落ち着きが取り戻されたのであろうナラノヤエザクラが東円堂旧跡に復活したのである。奈良町の住民にとってナラノヤエザクラはかけがえのないサクラであったことがわかる。

また金沢昇平『平城坊目遺考』(1890) には

「八重桜　今師範学校内にあり　八重さくらハむかし東圓堂の前　東圓堂ハ今師範学校構内　東金堂の辺にも有しよし」

とあり、明治20年頃にはナラノヤエザクラは師範学校構内だけでなく興福寺東金堂付近にもあったことが知られる。

川端（2006）においてナラノヤエザクラの増殖技術の確立は安土桃山時代にはすでに記録されていたことを論じ、複数のナラノヤエザクラを紹介した。貝原益軒は八重桜が「但し一所にかぎるべからず、興福寺内に八重桜甚多し」とし、江戸時代初期には江戸に伝えられ園芸家たちには奈良桜として膾炙されていた（川端, 2001)。後述するようにナラノヤエザクラは奈良公園にたくさん植わっており一本に限定することはない。

明治21年には奈良公園がそれまでの興福寺旧境内域の一部から東大寺境内、春日神社境内、春日山原始林、若草山を含む区域に拡大された。当初は大阪府時代から公園管理委任されていたという奈良郡役所が管理を行ったが、県議会で郡長の特任を解除する提議がなされ奈良県庁が本格的に管理を行うこととなった（明治25年9月23日臨時県議会提議、年末付で特任解除)。

翌年に早速小牧昌業知事は奈良公園の整備にのりだし、造園家の小沢圭次郎へ奈良公園の改良設計を依頼し、小沢は6月「奈良公園改修図解」を提出する。その改修案に

「第二條、五重塔下ヨリ大湯屋ニ至ル中央ノ地ニ大道小渓ヲ開通シテ梅園ヲ作リ又其北辺ノ路傍ニ八重桜ヲ植足ス可キ事」

が示され、

「〇附言　奈良ノ八重桜トテ古ヘ歌詞ニ名高キモノ有リシユエ終ニ天下後世ニ鳴リ渡リタル程ナルカ、其樹其花ノ何如ハ今ヤ之ヲ知ル可ラスト雖モ（注、東京の小沢はナラノヤエザクラの奈良町における現況を熟知しておらなかったのであろう)、愚案ニハ三区共ニ無数ノ八重桜ヲ培殖シテ奈良公園中ノ主木ト為シ、世人ヲシテ八重桜ヲ見ント欲セハ宜シク奈良ニ行ク可シト云ハシムルニ至ラン事ヲ欲シテ已ム能ハサルナリ」（中略）

と、奈良公園を一大ナラノヤエザクラの名所にと計画した理由は

「苟モ桜ヲ植ント欲スル処ハ悉ク八重桜ノミヲ培殖シ置ケハ、後年ニ及ンテ奈良公園ハ必ス八重桜ノ勝概ヲ以テ復タ天下ニ著ハヽニ至ル可シ」

としている。

小沢の改修案は知事への反発もあり議会の反対に遭い、実行のための予算案は否決され挫折する。県議会では奈良公園にはヤマザクラが相応しいとされた。

小沢の奈良公園改修計画案は実現しなかったが、翌年に新しく発足した奈良公園改良諮詢会で

は土倉庄三郎のナラノヤエザクラ植栽提言があり、川端（2005）において紹介した。奈良町の観光としてやはりナラノヤエザクラは注目されていたのである。

ナラノヤエザクラはその後も多くの明治・大正期の奈良の案内記、絵図に師範学校前・東円堂跡「八重桜」と紹介されている。その一例を紹介すると、水木要太郎『大和巡』（1903）には「師範学校は観学院（ママ）の旧趾にして門内なる八重桜は東円堂の趾に空しく「古の奈良の都の」名残を留めたり。」といにしえの奈良の都の繁栄をナラノヤエザクラにこめて懐古している。大伽藍を誇った興福寺の衰頽が「東円堂の跡に空しく」に表現されている。

奈良公園（正確には、師範学校前もしくは興福寺境内）にはすでにナラノヤエザクラが植わっていた。しかし、小清水卓二氏の誤説ナラノヤエザクラ三好学発見説に影響されて近年まで明治時代にはナラノヤエザクラがなかったように膾炙されてきた。写真にも残っているように師範学校前には博覧会社により設けられた石垣に囲まれたナラノヤエザクラが存在しており、またすでに多くのナラノヤエザクラが愛されていたのである。

昭和10年5月5日の大阪朝日新聞奈良版には、

「名勝に新点景　甦る古都の名木　公園隈なく八重桜実情調査　県公園課の手で

衰滅に瀕する古都奈良の名木八重桜については奈良女高師植物学教室小清水教授らが研究的に隠れた残木の探査を進めているが、一方名勝奈良公園を預かる県公園課では古都観光地の一景物として保存上の立場から、こんど同教室の応援を乞ひまず公園一帯にわたる八重桜の現状調査を行ふに決定、三日同課川島技手は同校久米助教授と共に杜深く匂ひを探ねつゝ実地踏査を行った、この結果現存する八重桜は例の天然記念物指定東大寺知足院の古木をはじめ男子師範学校玄関口および既報小清水教授発見の同校附属女学校庭、高畑町生川清満氏宅などにある八本ほか東大寺、興福寺、春日神社境内あるひは県公会堂にも幾分残ってをり、全部で四十八、九本あることが明らかになった、これらのうち県公会堂のは根廻り五尺余といふ老大木、二号館前に二本もあって目と鼻の間にありながらけふまで気付かずにいたものだが、公園課ではその標本とともにこれを文部省嘱託三好博士に報告、とくに公会堂の分は天然記念物の指定方を申請することになった、同課ではかうして相当残木のあるうへはこれらを元木として今後ウント繁植し公園内各所に接木増殖を行って亡びゆく名木を大々的に復活、開花期も幸ひ四月下旬から五月上旬にかけての遅咲きで、奈良公園としては藤の見頃までをつなぐもっけの点景ともなるので風致上からも積極的にこの計画を進める意向である」

と、奈良公園には公園課川島技手と久米道民の調査により多数のナラノヤエザクラが見つかったことを報道し、特に県公会堂には老大木まであったことを記載している。

公園課（名称には変遷があるが総称として使用）の公文書にはサクラを植えた記録はみられるがナラノヤエザクラを植えたという明確な記録が現在みあたらない。新聞記事から推察すると公園課自身はこの時期までは植えていないと思われる。

県公会堂のナラノヤエザクラの老大木であるが、このナラノヤエザクラは公会堂の設立以前から植わっていたものと理解できる。公会堂はもと

「明治二十一年、第六十八国立銀行（本店は郡山町）・第三十四国立銀行（本店は大阪市）の両奈良支店が集会所として奈良倶楽部を春日神社境内の水谷橋の近くの旧四恩院跡に建設した。」（『奈

良公園史』1982)

ものを明治33年に県が譲り受け購入したものである。奈良倶楽部建設当時にナラノヤエザクラを植えていたものと思える。

昭和のこの時期までに公園課がナラノヤエザクラを公園内に植えたか否かはっきりしないが（朝日新聞記事からは植えたことは窺えない)、奈良公園に対していま一人熱情を注ぎサクラを植えた人物がいる。それは石崎勝蔵である。北村（1969）によると石崎は奈良公園を愛し二十年間に1845本の植樹を行ったという(奈良のサクラの植樹では川路聖謨が著名であるが石崎の寄付がはるかに多い)。管理事務所に残された奈良県庁文書にもいくつかの寄付願の文書が残っており、そのなかに八重桜（奈良で八重桜と云えばナラノヤエザクラをさす）もみえる。寄付者は石崎一人ではないがその数の多さは他に比べるべきもない（なお、石崎は土地も一部寄付している)。確認された数からしてナラノヤエザクラはこのなかに含まれているものと思われる。

上記のようにナラノヤエザクラは明治時代からも多くの本数が奈良公園あるいは奈良町で植わっており愛されているのである。

参照文献（新聞は本文）

金沢昇平．1890→1998．平城坊目遺考．五月書房．

川端一弘．2001．江戸時代前期の「ナラノヤエザクラ」の記録．奈良植物研究 23：15－19．奈良植物研究会．

川端一弘．2005．近現代のナラノヤエザクラについて．奈良植物研究 28・29：15－19．奈良植物研究会．

川端一弘．2006．『多聞院日記』に記録されたナラノヤエザクラ．生物学史研究 77：63－67．

北川尚史．1997．岡本勇治---奈良県植物研究の先駆者---．覆刻版大和植物志：1－11．大和精版印刷．

北川尚史．2004．ナラノヤエザクラ．奈良公園の植物：129－131．トンボ出版．

北村信昭．1969．奈良公園開発の恩人 陰徳の人・石崎杏陰翁五十年祭に因んで．奈良県観光 157．

水木要太郎．1903．大和巡．第五回内国勧業博覧会奈良県協賛会．

奈良県庁文書『明治二十六年　奈良公園改修一件』奈良県立図書情報館所蔵．

奈良県庁文書『明治二十七年　奈良公園改良ニ係ル書類　一』奈良公園管理事務所蔵．

奈良公園史編集委員会編．1982．奈良公園史．奈良県．

鳥居武平．1892．奈良名所案内詞．購文堂．

山上豊．2003．奈良博覧会と「正倉院御物」．奈良県の歴史．山川出版社．